

優秀賞

大きな花を咲かせるために

都城市立祝吉中学校 3年
徳永 海音

皆さんは、「多様」と聞くとどのようなことをイメージしますか。私は、まず「一人一人違う」という言葉が思い浮かびます。

私の母は、ダンスで障がいのある人もない人も共に踊れる「ダンスワークショップ」に積極的に取り組んでいます。私は、小さい頃からどこからが障がいとどこまでが普通の人なのか分かりませんでした。そもそも、「普通って何だろう。」と考える日が多々ありました。年を重ね、多くの人と関わってきましたが、人の考えや言葉に流されてしまう時がありました。

ある日、町のお店で片足をひきずりながら歩く人を見て、友達が「あの人、変だよね。障がい者かな。」とさらっと私に聞いてきました。私は、自分の意見を持たず、「うん、そうかな。」と曖昧に答えてしまいました。皆さんなら、この場合どのように答えるでしょうか。

その後、家に帰ってもう一度考え直してみました。いろいろ考えていくうちに、分からなくなってしまい、私の脳内会議は終了してしまいました。その時の私には結論を出すことが出来なかったのです。

身の回りの事を、さまざまな立場から考えられるようになった頃、私は、母のダンスワークショップを見学できる機会がありました。行ってみると、足の不自由な人、言葉がはっきり話せない人、多くの人がありました。その中で真っすぐ一人の女の子を見つめる母に私は、息をのみました。その子は、言葉がはっきりせず、話すことが上手く聞き取れませんでした。しかし母は、その子をじっと見つめ、まるで目を見て心で聞くかのように真剣でした。その姿がとても輝いて見えました。その時私は、初めて普通の人と障がいのある人の間に壁など無く何も変わらないのだと思いました。それから、私は女の子の仕草やそのダンスにとっても魅了されました。心から楽しそうに踊る姿はどこまでも輝き、私に、手を差し出してきているようでした。私は、とてもすがすがしい気持ちでワークショップを後にしました。その日見た空は、雲ひとつなく、たった一本の光だけが真っすぐ希望をさしているように見えました。

その後、母と話す内にその女の子は、私の一歳上だということが分かりました。私は、これまで、「年が近いと出来る事もほとんど同じだろう。」と

思っていました。ですが、それは全く違いました。年が近くても、人それぞれ出来る事や考えている事は異なっていてどれもその人の個性だ、という事を彼女との出会いで知る事が出来ました。その女の子は、私に、多様な考え方を教えてくれました。

二〇二〇年の東京オリンピックが迫ってきた今、「多様な社会」を目指していることが見受けられます。そこで、障がいのある人も共に生きていける世の中、という事が注目されています。障がい者が行うからすごいと思う事が私にも多々ありました。しかし、障がいが特別なことではないのです。あの一人の女の子と出会えたので私の考えや、思う事が一気に変わったことで、日々の生活する中で、すばらしいと思うことやありがとうという感謝の気持ちが何倍にも増え、私の心はより豊かに広がっていきました。

最後に、私の考える「多様」とは、障がいのある人とない人が共に助け合いながら認める事ではなく、一人一人が持つ得意なこと、出来ること、楽しいと思うことをたくさん集め、それを共有していく事だと考えます。つまり、それぞれが持つ花を大きく育てられる環境をみんなで作って集める事によって、花束にし、その花束をみんなとひとつの輪にすることでより一層大きな花になるのです。自分の周りが鮮やかな花たちに囲まれると、小さな事でも幸福を見つけられる社会になっていくのではないかと思います。私も、みんなと力を合わせて、大きな花を咲かせるために小さな事でも努力していきたいと思います。